

南原利夫先生を偲ぶ

1926年7月兵庫県姫路市に生まれる。1951年東京大学医学部薬学科卒業、1954年同大学院特別研究生前期修了、1955年同助手、1956年北海道大学医学部薬学科講師、1957年薬学博士、同助教授、1960年米国スロン・ケッテリング^{がん}癌研究所文部省在外研究員、1961年東京大学薬学部助教授、1966年東北大学医学部薬学科教授、1972年東北大学薬学部教授（学部昇格に伴う配置換え）、1979年日本分析化学会学会賞受賞、1983年東北大学薬学部長（1986年3月まで）、1985年日本薬学会賞受賞、1988年東北大学薬学部長、紫綬褒章受章、1990年東北大学定年退官、(財)食品薬品安全センター秦野研究所研究顧問、日本分析化学会会長、1991年日本薬学会会頭、1993年中央薬事審議会会長、1994年永井財団国際賞受賞、1995年星薬科大学学長、1996年星薬科大学理事長、国際薬学連合（FIP）永年薬学研究顕著功績賞受賞、日本医用マスペクトル学会功労賞受賞、1998年日本私立薬科大学協会副会長・理事長協議会会長、2001年星薬科大学理事長・学長 任期満了退任、2024年瑞宝中綬章受章・正四位。

2024年4月20日、元日本分析化学会会長・本会名誉会員の南原利夫先生が97歳でご逝去されました。前日までご自宅で普段通り過ごしていたそうです。余りにも急な訃報で、当初は家族葬とのことでしたが、先生を慕う何人かが駆けつけ、少人数ではありましたが4月22日と23日、供花にあふれた穏やかな葬儀が執り行われました。ここに謹んで哀悼の意をささげると共に、先生の業績と思い出を振り返り、追悼文とさせていただきます。

南原先生は、東京大学・北海道大学などを経て1966年に教授として東北大学に赴任されました。「実験器具を買うために自ら東京に買い出しに行った」、「道路が未舗装なので仙台駅で長靴から革靴に履き替えた」など当時の話も度々聞いておりました。私にはその苦勞を伺い知れませんが、研究室の立ち上げのみならず、黎明期^{れいめい}の東北大学医学部薬学科を現在の薬学部へと導く礎を築いた苦勞を感じたものです。

また専門の分析化学では、「医と薬は車の両輪である」との考えから、薬学・バイオメディカルにおける分析化学の方向性を示されました。すなわち、ライフサイエンスとしての薬学の分析化学は、「生体物質の機能の解明」、「病態との関連の解析」、「薬物の有効性・安全性の確保」を指向するものであり、微量成分の質的量的変動を的確に把握することの必要性を強く訴えられました。そのため、薬学の分析化学の研究目標を、「微小差の弁別」、「非破壊化学性の利用」、「極微量試料を対象とする方法論の確立」と定め、薬物のみならずステロイド化合物全般を主な分析対象とし、それぞれ「分離系の改良」、「抱合型代謝物など不安定かつ高極性化合物の分析」、「低分子ハプテンのイムノアッセイや検出指向の誘導体化」などに展開しました。その業績は、400報以上の原著論文、日本分析化学会学会賞、日本薬学会賞、紫綬褒章、国際薬学連合（FIP）永年薬学研究顕著功績賞に結



実し、教育者としても数多くの人材をアカデミア、製薬企業などに送り出しました。

東北大学を退官後も厚生労働省などで精力的に各種要職を務められ、中でも星薬科大学学長・理事長としての功績は、星薬科大学九十年史に南原利夫語録など7ページにわたり記載されています。公職から退いた後は後進を温かく見守りながら、趣味の庭いじりと幼児期からこれまでの自分史・エッセイの執筆などをされていたそうで、7~8巻に及ぶ自費出版の書は、私にとって人生の道標となるものでした。

最後に個人的な思い出も少し記したいと思います。私が先生のもとで研究を始めたのは学部4年生からです。当時の先生の年齢を超えた現在、研究者としても教育者としても、いまだに全く足元にも及ばない不肖な弟子であるため、「大江君、頑張らなきゃあかんよ」と姫路訛りの激励が聞こえてきそうです。こんな出来の悪い私にも、在学中から最近まで、公私にわたり気に留めて頂きました。アメリカ留学中も、「日本からインスタント味噌汁やお茶漬けを持ってきたからニューヨークで会わないか」との電話があり、ロックフェラー大学のキャンパスを散歩しながら、私の将来や星薬科大学の新館建設にかける思いなどをお聞きしたのが懐かしい思い出です。また、昨年ご自宅に電話した際、息子の大学合格を喜んで頂き、「頑張って100歳まで生きるよ」とおっしゃったので、「私の最終講義までお願いします」とお話ししたのが最後の会話となりました。

先生の弟子たち、さらには孫弟子たちには、先生が道筋をつけた「薬学・バイオメディカルにおける分析化学の考え方」が脈々と流れています。南原先生、我々もいつの日かそちらにお伺いします。そのときは、昔恒例だった「南原先生を囲む会」を企画しますので、それまで安らかにお休み下さい。

〔東北大学大学院薬学研究科教授、

日本分析化学会東北支部長 大江 知行〕